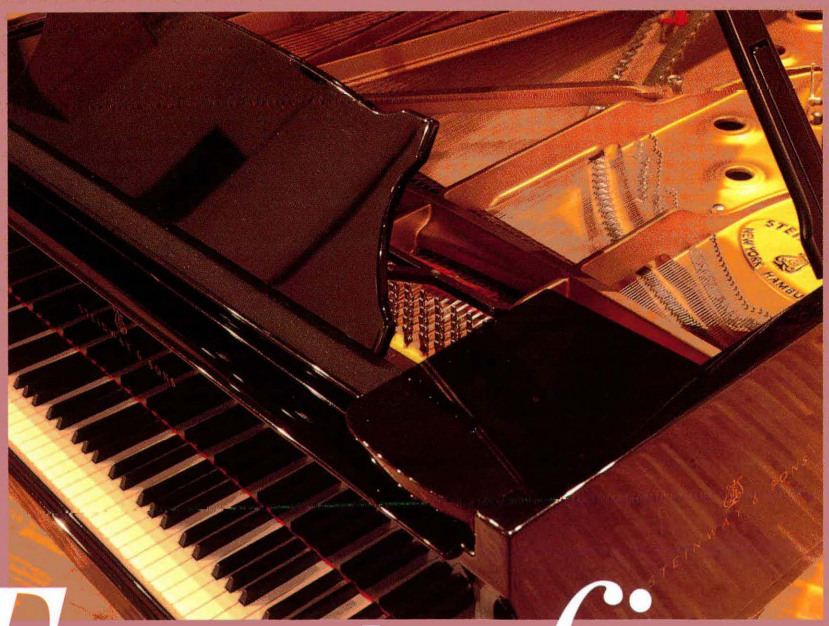
25年の記録



A Twenty-five Year Record

音楽学校が生まれるまで

H・チースリク

1.ゴーセンス神父、広島に来る

初めてゴーセンス神父に会ったのは東京で、1937年か38年であった。そのとき彼は、日本語などの勉強で疲れて髪の毛をすっかり失っていた。それで、土橋神父から漢方による治療を受けていた。すなわち毎日3度、土橋神父の部屋で、中国から持ってきた特別な石を土橋神父がおごそかに手でなでて、それからゴーセンス神学生の頭を三度なでているところであった。不思議にも、しばらくたつと、また髪の毛が生えて、しかも前とは違って、きれいに縮れた毛であった……。

ゴーセンス神父は1908年7月19日に、ベルギーのリエージュに生まれ、1926年9月23日にベルギーでイエズス会に入り、まだ神学生として日本へ送られて、1936年10月7日に無事に着いた。1938年6月末に神学の勉強のため3人の神学生と共にヨーロッパへ帰ったが、しかしドイツの不安定な状況のためか、まだ神学課程が終わらないうちに日本へ戻り、1941年に東京で司祭に叙階され、それから広島幟町の教会へ送られた。管区長のラサール神父は既に1940年10月に幟町に移り、そこの主任を務め、彼の秘書であった私も一緒に幟町の司祭館に住むようになった。

ゴーセンス神父の住まいは司祭館の2階、入口の上につくられたバルコニー付きの部屋であった。神学の最後の1年か2年の分をまだ済ませていなかったので、神父は毎日、椅子をバルコニーに持ち出して、神学の教科書を開き、タバコを吸いながら神学の勉強に励んでいた。信者のあいだにも近所の人々にも噂になった光景であった。

その頃、ラサール神父は教会の存在を広く知らせるために、たびたび中国新聞ホール（当時は電車通りにあった）で音楽会を催すことにした。すなわち、ラサール神父はチェロ、ゴーセンス神父はヴァイオリン、当時まだ神学生であったルーメルさんはピアノ、それから笛を吹いた三木正さんたちの「オーケストラ」であった。ラサール神父はチェロの練習をたいてい夜中に行ない（3階で寝ていた私は目が覚めて、また今夜も猫がうるさいなあと思った）、ゴーセンス神父はモーツァルトのアイネ・クライネ・ナハトムジークを毎日練習していた。そして楽譜のページをめくることを避けて、2冊の本からページをはずして1枚のベニヤ板に貼りつけた。こうして1時間もページを繰らないで済ませた。ただ私がびっくりしたのは、音楽会の時にもこの大きなベニヤ板を舞台の上にまで持ってきたこと。おそらくこのオーケストラはゴーセンス神父にとって、僅かではあろうが、将来の音楽学校の種となったのではなかろうか。

ところが、まだ神学の勉強が終わらないうち、1941年12月8日に「大東亞戦争」が勃発した。そして翌1942年の初めにベルギーはドイツに対して戦争を宣言したので、日・独・伊三国同盟の関係で日本の敵国となった。こうして、ゴーセンス神父も警察から三次の敵国人抑留所へ送られた。

幸いに、そこを担当していた2人の警察官ともこの制度に不満であって、できるだけすべてをらくにしようと努力し、自ら小さい聖堂と祭壇をつくり、毎日、花も飾った。なおゴーセンス神父はまだ神学の最終試験を受けていなかったので、ある日、1人の警察官が神父を連れて広島へ行き、幟町に集まった試験官4人の前でそれを済ませるようにと世話をした。

ところが翌年、全員が浦和の厳しい収容所へ送られたので、もとから神経質のゴーセンス神父はとうとう耐えられなくなって、交換船でアメリカへ送られた。果たして将来ふたたび日本へ帰られるのであろうか?

2.音楽教室の誕生

1945年8月6日、朝8時15分、広島の上空に原子爆弾がピカッと光って、広島市の大部分を一瞬に破壊した。幟町の教会に居た全員は運良く助かった。司祭館に居た管区長ラサール神父、主任司祭のクラインゾルゲ神父、それからシュフェル神父と私は、家が崩れなかったので直ぐ外に飛びだし、下敷きになった伝道士家族（主人と長男は県庁へ出向く途中で行方不明になった）、また幼稚園の2人の先生を掘りだすことができた。そのうちに火の手が近づいてきたので、みんな浅野泉邸へ避難した。そして、70年間は広島では生きることができない、という「報道」が流れた。

その年の12月6日、ラサール神父と私は、焼跡につくった3畳のトタン・バラックへ戻り、将来の教会の復興のために働き始めた。1月には、「住宅営団」から12畳分のバラックを2つ買って、それを合わせて聖堂兼住宅兼伝道場にした。またもう1つ12畳バラックを買って、これを主任司祭クラインゾルゲ神父の住宅にした。同時に、司祭館の焼跡には基礎が完全に残っていたので、ラサール神父はその上に前司祭館の設計を使って、新しい司祭館の建築に着手した。1階は前とほぼ同じに、2階を仮聖堂にした。

1946年の初めにラサール神父はイエズス会総会のためにローマへ行き、また以前から結核を患っていてこのたびなお原爆症にかかったクラインゾルゲ神父も東京の聖母病院に入院したので、私は主任代行となった。

1947年、復活祭の少し前にゴーセンス神父がアメリカから戻って、やはり広島幟町の司祭館に住むようになった。彼はすっかり元気になっていたばかりでなく、アメリカで音楽を勉強し学位を得て、そして将来の計画のため5千ドル（当時は1ドル360円）の寄附をもらってきていた。しかしこの寄附について、そして将来の計画それとも「夢」について、彼は沈黙を守っていた。言うまでもなく、将来、音楽大学をつくりたいという夢について話したら、気が狂ったと誰もそれを本気にとらないで、かえって長上たちは彼をやめさせて広島から呼び戻すにちがいない。彼自身、それを心配していたのであろう。

ある朝の食事の時、ゴーセンス神父は突然、私にたずねた。「私がこの隣りの大部屋で音楽教室を始めたらどうでしょうか?」と。もちろん私はただ主任代行だけであったが、当時、広島に2つか3つのこのような教室ができていたから、教会の1つの布教活動としてこれを許可する権限はあると思って、青信号を出した。それが将来、大学にまで発展するだろうとは夢にも思わなかった。

幸いにも私たちは1945年の空襲の2日前に、司祭館にあったピアノを長束の修練院へ疎開させていた。それでさっそくそのピアノを幟町の司祭館へ持って帰り、食堂の隣りの部屋へ置いた。9月1日に「教室」は出発した。最初はスケールはそれほど大きくなかったが、ゴーセンス神父は、広島でよく知られていた音楽家、特に声楽、ピアノ、ヴァイオリンなどの先生を集めることができたので、早く発展していった。ピアノのレッスンは食堂の隣り、ヴァイオリンと声楽はバラックの伝道場で行なわれた。ところが、これらの部屋は音楽の教室として建てられたわけではなかったので、司祭館や伝道場で教理研究を行なうことはかなりむつかしくなった。いずれにせよ、この教室は早くも広島で評判になった。

ある日の朝の食事の最中、ゴーセンス神父は新しく印刷された音楽教室の案内を私に見せた。音楽教室の案内が初めてプリントになっていることを少々誇らしげにいばって渡した。私はこれを手にするや直ぐ、「ここにミス・プリントがある」と言った。ゴーセンス神父はびっくりして「どこ?」とたずねた。「教室とは、ケモノ偏にオウ〈狂〉と書くんじゃあないですか」と私は言った。もちろん神父は怒って、それから大笑い……。

3.音楽短期大学

私が「音楽教室」の許可を与えた時ただ教会の1つの活動と考えていたのと違って、ゴーセンス神父は将来のため実に大きな夢を持っていた。間もなく、アメリカから貰った5千ドルの寄附で2階建の家をつくりはじめた。その建物がやや出来上がりかけた頃、イエズス会の管区から問合せがきた。すなわち、アメリカの恩人から手紙がきて、数年前にゴーセンスという神父に5千ドルの寄附をあげたが、その後なんの連絡もなく、ゴーセンス神父は生きているのか、またその金はどうなっているのか、とのこと。こまったなァ！ ところが御礼を忘れていたゴーセンス神父はうまく答えた。今その家はちょうど建築中であって、それが出来上がり次第、写真と共に御礼を言うつもりだった……。とにかく、2階建の建物がその年に出来上がった。

それから新しいスタート。「校舎」ができたので正式に音楽学校の許可を、広島県ないし文部省に申請することができた。だが、イエズス会の長上が問題を呈した。世界で多くの学校を経営してはいるが、音楽学校は1つか2つしかないから、日本でつくることは大胆すぎるとかなり躊躇していたからである。いろいろ相談しつづけた末、ようやく長上から許可がおりた。ゴーセンス神父はたいへん喜んで、手続きの一切と他の準備を始めた。そして数年後のある朝の食事のおり、「音楽短期大学」の案内を私に見せた。私は「なるほど、校長が短気だから短期大学になった」と言った。このとき、ゴーセンス神父も大笑い。

その後、ゴーセンス神父はまたヨーロッパへ出かけて寄附を集めたが、運よくベルギーのエリザベト女王からかなりの援助をうけたので、その御礼として、エリザベト音楽短期大学と名付けた。1952年4月に1期生が入学した。

今は大学院まで併設されているので、50年前の夢は立派に実ってきた。おそらく、この祝いには、天国のゴーセンス神父は神様から「名誉聖人」の尊称を与えられるであろう。

チースリク神父はイエズス会士。1998年9月22日帰天。本稿は昨年、本学と幟町カトリック教会の依頼でお書きくださったものです。

エリザベト25年の記録

保田史郎

■はしがき

わが日本の近代のあけぼの（明治）が開幕してからすでに100年が過ぎ去った。また教育のあゆみの上から見て、学制が頒布（明治5、1872年）されてからの100年が記念されたのも一昨年のことであった。人類の歴史、人間のいとなみはそれが国家民族であれ個人であれ、すべて過去を持ち、現在に生き、そして未来に向かってその理想と夢の実現、繁栄と進歩を期待しようとする。大は聖賢の生誕を記念してその業績をたたえ、その精神を回想したり、小は個人の誕生や結婚を祝福して将来への前進と飛躍を祈念するのもわれわれ人間の自然感情の発露であり、美わしい行為である。

本学がささやかながら創立25周年を記念して思い出を新たにし、将来への施策を強化しようとするのもまことに当然のことであろう。

しかし本学の四半世紀のあゆみが日本における一般の事例と異なっていることをまず指摘しなければならない。すなわち、一外国人としてのカトリック司祭（故E・ゴーセンス師）の手によって、みずからは建設のための資金を持つわけでなく、浮かんできたアイディアから思いついて、ほとんど欧米、特にベルギー国やイエズス会その他の篤信家の浄財（喜捨）を仰ぎつつ、純粋に教育事業（最初は布教を兼ねた）として発足したことである。しかも世界最初の原爆投下により廃墟と化して人心は混迷のさ中にあり、その方向を失なって右往左往している敗戦直後の広島の地に、みずからも敵性国人として捕虜収容の苦々しい体験を有する身にもかかわらず、一念発起され、後に記すように想像を絶する苦闘のあゆみを続け、小規模とは言え国際的な性格を有する音楽単科の4年制大学の実現をみるまでの25年の歴史は、数字を越えて長く険しい、故ゴーセンス師の聖職者としての強烈な人間愛と、芸術（音楽）探究へのひたむきな熱情の放出の記録と申しても過言ではあるまい。今、師はこの世に限りない愛着を遺しつつも、全身全霊を神に捧げた喜こびを天国で味わっておられることと信ずるのである。

著者は25年の本学の記録を、その外見と変容の上から人間が成人するまでの期間にあわせて4つの時期、すなわち胎動期、誕生期、成長期、成人期に区切ってまとめることが不思議にも適合することを発見し、各期の姿を総合的に観察し、限られたスペースをできるだけ有効に充たしたいと思う。また、関係者の協力を得て、学園のあゆみを沿革誌として一覧表的にまとめ、参考資料として各期の学舎と故ゴーセンス師をしのび得る写真数葉、それに本学園出身者の年次別統計等も掲載することにした。

本稿をまとめるにあたり、特に草創期—音楽教室開設前後—から各種学校時代の貴重な思い出は、創業後間もなくゴーセンス師の片腕として若きエネルギーを傾注し、エリザベトをして今日あらしめた中核的存在としての村上教授、当初絵画教室に通い、後に本学専任となられている音楽科長の福田教授、声楽レッスンを担当し現在声楽主任としての山本千恵子教授、ピアノレッスンを担当し、現在本学のピアノ副主任である三並惇子教授、さらに初期の広島音楽学校第1回卒業生で、その後国立音楽大学に進み、現在ヴァイオリン担当の由居助教授の各位から追憶記を提出願い、さらにそれ以外の各種の資料を参考にさせていただいたものを骨子としている。もちろん、ほかに当初より学園建設と運営のために絶大な協力と推進の誠意を捧げられた多くの方々の思い出を寄稿願うことも考えたが、その暇もないことを残念に思う。

また本学25年の記録を、ゴーセンス師の人柄や逸話の数々とともに詳細につづることはとうてい不可能であるから、今はただとりあえず学園の苦難のあゆみの跡を概観してその今昔をしのぶ資料を提供する方向で筆をすすめることにしたい。

本稿は、創立25周年の1973（昭和48）年に、保田史郎教授（故人）が執筆し、記念誌に発表された原稿の、ごく一部を修正・割愛しつつ、ほぼ原文通りのものです。再度記念誌に掲載するにあたり、登場する方々のお名前、肩書き等は執筆当時のままとなっています。尚「沿革誌」は本誌の「50年のあゆみ」に集約いたしました。

■第1期　胎動期

（昭和22年9月　～　昭和27年3月）

原爆一閃、文字通り廃墟と化した広島にも草木の緑が息吹き始めていた。根強い雑草が背丈ほどにも生い茂っていた現在の幟町カトリック教会の一角、はじめはゴーセンス神父の居室（神父館）、やがて正面のバラック建の仮校舎（小屋）の中に、昭和22年9月突如として「広島音楽教室」という小さな種子が蒔かれたのである。それから5年後の昭和27年4月「エリザベト音楽短期大学」が誕生するまでは、いわば胎動期と呼ぶにふさわしく、何がどのようにして生まれ出るか、期待と不安の交錯の中に試行錯誤的な苦しみを重ねた混迷の時期と言わねばなるまい。

戦時中の捕虜収容所（広島県三次町、その後浦和市に転送）から解放されたベルギー国籍のゴーセンス師は、念願のアメリカでの音楽研究を終えて萩原晃神父（当時広島教区長）、フーゴー・ラサール神父（世界平和記念聖堂創立者、戦後日本に帰化して愛宮真備と改姓、広島市名誉市民）、チースリック神父（現上智大教授日本キリシタン史研究専門家）、そのほかの学者神父（クラインゾルゲー高倉と改姓帰化、ラーデマン、シュワイツァー、小出神父等）の多かった広島、この幟町カトリック教会へ配属された。。

ところで、いかにゴーセンス師が荒廃の地広島において、日本の青少年に芸術を通して真理を愛し、美を探究する精神を育成しようとの決意が強かったとしても、その時と処と人の出会いに恵まれなかったならば現在のエリザベト音楽大学は出現しなかったであろう。聖職者の使命遂行のための一つの手段として音楽を活用し、みずからヴァイオリンの弓をとっていたゴーセンス師（以下ゴ師と略称させていただく）にその時と処と出会いが与えられたのが昭和22年の夏7月のことである。たまたま尾道カトリック教会の懇請により同地で小演奏会を開くことを承諾されたゴ師（第1ヴァイオリン）と師の求めに応じて協力出演された3名の方との出会いは特筆すべきことである。その3名とは、当時NHK広島支局の職員で、ヴァイオリンに巧みな森川定実氏（第2ヴァイオリン）、作曲家兼セロ奏者である市場幸介氏（満州にて終戦、同地で捕虜収容中セロ奏者として優遇、他の日本人よりも早期帰還）、ヴィオラ兼ヴァイオリン奏者の現講師瀬川昌二氏であった。尾道から帰広の車中で一同その日の演奏会の成功を祝いながら、同時に敗戦後の日本人の異常なまでの音楽熱に驚嘆されたゴ師の提唱により、それでは広島に音楽教室を開設してみたら……という談話が持ちあがった。これがそもそも本学の発端となったと申して差しつかえないのである（村上教授談）。気の早いゴ師の遠大なアイディアによる願いを受けて、上記の森川定実氏が世話役となり、幟町カトリック教会内にあったバラック建の幼稚園の校舎1棟―それは校舎と呼ばれるようなものではなく、2間×6間=12坪（39.6m²）位のもので、当時岩国市のアメリカ進駐軍の有志が教会のために奉仕して建てられたもの―を幼児帰宅後の午後2時から借用認可の上、早くも翌々月（9月1日）を期して音楽塾―称して「広島音楽教室」―の募集が公表されたのである（注）。

（注）　この教室は最初に教会神父館のゴ師の自室（6帖の部屋位の大きさ）におかれたとのことである。戦時中の疎開先（長東修練院）から取り戻された教会所有の貴重品扱いの1台のピアノ（古びたアップライト）があっただけである。後に音楽学校時代に4台のピアノが購入されている（瀬川先生談）。

その教室の講師陣には当初ゴ師のほかに教会のチースリック師、上述の森川、瀬川、市場の諸氏、それにピアノの山上雅庸、声楽の太田司朗、（皆川氏は急病のため断念）の諸先生が名を連らね、後にピアノの山本雪子女史、広大附属小学校のピアノの山本寿先生（雪子女史の尊父）も参加されている。こうした動きに対して陰にも陽にも、当時広島音楽界の重鎮（専門家）渡辺弥蔵、水野康孝先生（現在岡山市の音楽長老）をはじめ、疎開在広中の遠藤宏先生（当時東大教授、指揮者として知名）、同比佐ご夫人等の声援と協力が示されたことも忘れられてはならないと思う。

さて、上記の音楽教室開設の報が伝えられるや、どっと堰を切られた水のように音楽愛好者はもとより、これを学ばんとする少年少女、既婚未婚の老若の男女100余名の申し込みが殺到したのであった。これでは単なる塾程度では収容しきれないことがわかり、本格的な音楽学校設立の議が持ち上がったわけである。それも翌23年4月開校を期して極めて短期間に形を整える必要があった。そこで前記の森川氏が一つの定職をもちながら、ゴ師の右腕となって日夜奔走され、神父館（現教授館）の完成後はそこに泊りこんで日夜画策に協力されたのであった。

各種学校の性格を有する音楽学校としても校舎その他の規格があり、県知事の認可を必要とするので当初の幼稚園の食客というわけにはゆかない。ゴ師の奮戦はここに始まった。聖職者の使命を帯びている上に芸術（音楽）への熱意と、まだ若きすさまじい程のバイタリティに充ちていた師は、ただちに外国への募金運動を開始された。工事の企画推進と相俟って短時日にして100万円の浄財―当時としては冒大な金額―が寄せられたことは驚きのほかなかったのである。これによって突貫工事的に建設されたのがいとも壮大（?）な現在の教授館（神父館）―後に増改築されてこの大きさ―であった。その裏（北側）に上記のバラック建の幼稚園舎がそのまま移転されて、この音楽学校の専用教室に加えられたことは全くの神の恵みと言うべきか。幼稚園の校舎が幼児の増加とともにさらにその東側に木造平屋建として新しく建設されたので廃物とすべき旧建物の譲渡を受けたということになる。

いよいよ応急の準備が整い、県知事の認可を得て新「広島音楽学校」の開校式が挙行されたのは昭和23年4月16日であった。当時の広島県知事楠瀬常猪氏の臨席の下にいとも厳粛に開校

—現音大の卵として—が宣せられ、正式に音楽教育のスタートを切った時のゴ師の心中、そしてその協力者、関係者の喜びは想像以上であったと推察されるのである。

この音楽学校は本科（修業年限3年）および選科（修行年限を定めず）から成り、第1回の本科生定員50名のところ300名余の応募者が押し寄せたという。さきの音楽教室の募集の時と同じく喜びは驚きに至ったと言うべきである。厳密（?）な選考の結果、入学許可された生徒は本科生54名、選科生150名で、教員スタッフは前掲の諸先生のほかに外国語担当および事務長として村上清人氏、ヴァイオリンに迎綾子女史、声楽に小寺きよ女史等が加わり、また一般科目には幟町教会のラサール（愛宮真備）師、シュワイツェル師、チースリック師等が当たり、次第に充実への方向を進んだのである（音楽学校時代の年次別在学生数は付録参照）（注）。

（注）　開校後のレッスンの様子、ゴーセンス（「五銭」神父）校長の逸話（珍談、奇談）や校内生活の諸相について、福田、山本千、三並、由居の諸先生からいただいた追憶記、その他の当時の先生の回想談を細かに紹介できないのは残念である。要約して少し触れておきたい。まず日本語であるが、初期にはあまり上手でなく、そのために先生や生徒とのすれ違いや思い違いのもととなり、雷鳴のような叱声となったこと、先生も生徒のように叱られてとんだ悲喜劇を演ぜられたこと、フランス語の時間の厳しさ、しかも言葉の問題で生徒には通じなかったこと等、あげれば沢山のことがあるということである。また合唱指揮のとき、熱がこもりすぎて夢中で低い天井を突き破られたという話、ご機嫌のよい時はまったく幼児のように喜ばれ、特に定期演奏会、クリスマスや誕生日パーティのときに「アヴィニョンの橋で」のフランス語による歌とともに踊りがはじまったり、ユーモアがつぎつぎと出てきたこと等、生徒の側からのいろいろな思い出、先生の側からの追憶談も無数にあるとのことである。

さらに貧弱な校舎の部屋に、冬でも丸い火鉢が一箇ずつしか配られず、練習室には火の気がなかったこと、よく「コソどろ」が入って靴や自転車等の所持品が盗まれたこと、ついにはゴ校長の貴重な赤塗りのオートバイが盗まれた話等述べきたれば限りがないのである。なお、その後森川氏は東京に転任されたので村上氏が同じ宿舎に長期間起居されてゴ師の顧問兼事務長の役をひき受け、日夜接触されたことも思い出深いことであろう。

かようにして滑り出した音楽学校であるが、校長としてのゴ師の構想は雄大なもので、単に音楽教育だけでなく、あらゆる分野の芸術教育をという夢の実現へと発展し続けたのである。すでにして、その年（昭23年）の9月15日には「広島邦楽教室」（箏曲・中野節子女史、尺八・島原帆山氏）の開設と、翌24年4月15日には「広島華道教室」（小原流の織田光文女史）および「広島茶道教室」（表流の永田清次郎師匠）が開設され、また同じく洋画（版画）家として海外にも知名の永瀬義郎氏を招いて「広島絵画教室」（後に画家の新延輝雄、広隆軍一先生も参加）も開設されたのである。その絵画教室に学んだ人々の中には後に中央画壇の各方面に活躍する専門家も出ているほどで、単にアマチュアの趣味にとどまらなかったことは注目すべきである—当時の生徒の中に国画会々員本田克己氏や、現福田教授（前掲）の名も記されている。

さらに翌25年4月15日には「広島演劇教室」（広大の当時仁科武光助教授を主任に、鳴沢教授、藤原与一助教授担当）を開設し、「フランス語教室」の追加を数えて、文字通り幟町カトリック教会の一角は、けんらんたる芸術の殿堂と化したのである。広島音楽学校の第1回卒業生を昭和26年3月に出し、第3回卒業生を昭和28年3月に送り出しているが、当時の学生は社会の不安定と経済事情のため入学後の転退が激しく、完全に卒業生として記録されているものは入学者の1割にも充たない実情であったことも記憶されるべきであろう。

かようにして広島音楽学校を中心として綜合芸術研究所と化したこの学園であるが、そのままの姿で発展を続けるには前途にあまりにも障碍が多かった。これまでは教会の附属事業的な性格の学校であり、それなりに意義と成果もあったが、財政的地盤を固めて独立的運営をなすにはこのままでの継続は許されない。その結果、法人組織を設立して独立の学校に変容する議が進められ、ついに正式の手続きによって昭和25年1月6日「財団法人広島音楽学校」として文部省の認可を得たのである。設立当初の法人役員はつぎの通りである。

理事長　エルネスト・ゴーセンス
理　事　萩原　晃（カトリック広島教区長）
〃　愛宮真備（幟町教会主任司祭）
〃　エミイル・キルシェル
〃　アントニオ・ド・シャンジー（長井一誠）
監　事　ゲラルド・トーラ
〃　ロベール・バロン

越えて昭和26年3月10日には、綜合芸術学園を目標として上記の組織の変更が企画され、ここに「学校法人広島芸術学園」が認可されたのである。そしてその年6月にはベルギー国皇太后エリザベト女王陛下を本学園の後援者として推戴することが裁下され、組織はさらに「エリザベト芸術学園」として生まれ変わることになり、苦しい胎動期は波乱万丈、しかもカトリシズムの精神に支えられて、健全な「みどり児」が母体の内からの生みの力と、内外（ベルギー、日本を中心として）を挙げての声援と協力のもとに誕生する機が熟してきたのである。これと並行して、本学園の母体の母体とも言うべき世界平和記念聖堂の建設も世界的スケールをもって着々と完成への道を進んでいたことも忘れられてはなるまい。また音楽学校の地盤の上に雨後の筍のように総華的に咲き誇ったもろもろの教室は「順次閉鎖されたが、それは決して単なる消滅ではない。原爆の災禍で一時は文字通り廃墟と化した広島に文化の種子を蒔き、豊かな実りに生長する若芽を見とどけ、戦後社会の復興と共に歴史的使命を終えて新たなチャンピオンにバトンタッチして退場

したと言うべきであろう」(福田昌作氏記)と。

昭和27年4月15日にはエリザベト音楽短期大学の開学式が行なわれ、ここに西日本唯一の私立単科の大学が誕生することになった。

■第2期　誕生期

(昭和27年4月　～　昭和34年3月)

上記の「エリザベト芸術学園」への改組は新制短期大学の誕生を促進することになったが、ここに特記すべきことは外交的儀礼もあるが、広島のこの小さな学園の出現に日本の皇室関係の方々、政府要人から沢山の激励と声援が寄せられているという点である。すでに昭和26年8月には高松宮殿下、つづいて9月下旬には秩父宮妃殿下および三笠宮殿下さえも貧弱な学園にご臨校賜わっているのである。

そして翌27年2月22日にはエリザベト音楽短期大学の認可決定を祝し、東京のベルギー大使館において高松宮殿下ご臨席のもとに「エリザベト芸術学園後援会」の発会式が挙行され、同短大昇格記念行事ならびに記念祝賀パーティ等相次いで催され、まことに多彩な誕生前夜祭の豪華版が展開された観がある。その前年、文部省に申請されたエリザベト音楽短期大学開設趣旨および後援会役員の顔触れは本学園の誕生をしのぶ貴重な記録として長く記憶されるべきものであるから、特にここに掲載させてもらうことにしよう(原文のまま)。

1.エリザベト音楽短期大学開設趣旨

本学の目的並びに使命に就いては学則第1条に述べられている通りでありますが、敢て茲に本学の特色とする点をあげて一言御説明申し上げたいと存じます。

即ち第一に「本学はカトリシズムの精神に基いた」所の人格教育を行う点であります。このことは決して単なる「カトリック教」に基いた宗教教育を施すことを意味するものではありません。私(ゴーセンス校長)の意図する所は文字通り「カトリシズム」(普遍性)の精神を基盤とし且つ真に芸術を愛し「美」の追求に真摯なる学生を教育することであります。そして教える者と教えられる者が同一目標の下に相互間を信頼によって生かされた所の精神的共同体を築き上げるべく一切を捧げて奉仕せんとする次第なのであります。その為に敢えて1学年30名という恐らく短期大学としては最少の規模のものを設立する所以であります。

第二に挙ぐべき点は地域的なる普遍性と申しますか本学のもつ、「国際性」に就いてであります。そもそも本校の前身たる「広島音楽学校」を創設しました動機というものが(若干私事に立ち入るので恐れいりますが)忘れもしない、昭和22年2月、未だ原爆の悲惨な広島駅頭に降り立った時の私の受けた印象に起因しているのであります。当時世相は混沌とし、広島は「不毛の地」とさえ呼ばれていましたが私はたとえ街そのものは不毛と化そうとも、人々の心には必ずや「美」を愛する心が再び芽生えてくるものと固く信じていました。そして一外国人神父として眼のあたりに日本人の大

いなる苦痛と犠牲を見たとき私は私の一生を捧げて之等の人々の心に再び昔のような芸術を愛し平和を愛する気持ちを生ぜしめたいと決心したのであります。「美」を愛する心は同時に亦「真」を究め「善」を行う心にも通ずるからであります。爾来4年間幸にも私は数々の熱心な協力者達の努力によって今日に至りましたが、去る8月には母国のエリザベト女王陛下の御耳にはいり、その直接の御後援を頂くという光栄に浴しました。尚その他別項の如き後援会も組織せられ、海を遠く隔てた各国からの協力と期待を受けて国際的な友好精神のうちに本学があり且つ亦近き将来交換教授、留学生の派遣等が実現出来ることは誇りとしている所であります。

第三の特色は本学が「広島」に設けられる点であります。前述の如く「原爆都市ヒロシマ」は世界に名を知られはしましたが寧ろ真実の評価はその将来にあると愚考致します。即ち原爆の洗礼を受けた当地が如何に平和都市としてよみがえり得るかという点にあると思います。幸い広島大学を始めすぐれた短大が2、3ありますが、情操教育方面に最も大切な芸術関係の教育機関が当地のみならず、中、四国、九州地域にわたって1校もなく従って中、高校芸術関係の教員の不足も甚だしいのが地方に於ける実状であります。固より音楽短大の如き地方都市に於て開設することは物的にも人的にも種々制約があることは事実でありますが、各方面からの強い御支援と御協力により必ずや地方文教に多大の寄与をなし得るものと確信するものでございます。

最後に本学の将来の構想に就いて一言述べますならば、本学は単なる音楽短期大学としてでなく従来、日本では余り顧みられなかった「宗教音楽」の研究部門に特に意を注ぎこの国に於ける唯一の存在たらしめたいと考えています。その外「比較音楽学」「民族音楽」等、ベルギーのブリュッセル国立音楽院との交換教授を通じて音楽の国際的共同研究をも計るべく努力中であり、たとえ小規模であろうとも異色あるユニークな短期大学として発展せしめたいと考えている次第であります。

2.本学の維持経営に就いて

(1)設置者

設置者は「学校法人エリザベト芸術学園」で之は現存の「学校法人広島芸術学園」の組織変更を申請中である。

尚本法人の理事にはカトリック教イエズス会及び広島地区の幹部が夫々就任しており毎年50万円の経営助成金を始め設備その他に関する臨時費も全面的に後援していることは他の私学と異なる所である。

(2)後援会

本学後援会は本学の維持経営面に於けるのみならず広く本学の事業に対するベルギー女王エリザベト陛下、高松宮殿下、同妃殿下の御後援の下に組織せられている所の団体であり、その名称を「エリザベト音楽学校後援会」と云う。

その目的とする所は「日本の青年に対しベルギー及びフランス芸術並びにその背景となっている所の宗教芸術に対する研究の機会を与え之を育成すると共に日本及びベルギー両国文化の交流を促進する」ことであり近き将来留学生の派遣、交換教授も実現の予定である。

尚現在の役員は次の通りである。

御後援者	エリザベト女王陛下	
	高松宮殿下	
	高松宮妃殿下	
(在日　エリザベト音楽学校後援会役員)		
名誉総裁	ローマ教皇使節	ド・フルステンブルグ(ベルギー人)
名誉総裁	ベルギー使節団長	ド・ラ・シュヴァルリー
総　裁	国立博物館長	浅野長武
総　裁	ベルギー使節団長令夫人	マダム ド・ラ・シュヴァルリー
副総裁	最高裁判所長官	田中耕太郎
副総裁	同　令夫人	田中峰子
財政顧問	大蔵大臣	池田勇人
財政顧問	日本銀行総裁	一万田尚登
会　長	国際文化振興会理事	坂本龍起
理事長	エリザベト音楽学校長	エルネスト・ゴーセンス
理　事	参議院議員	徳川頼貞
	参議院議員(前広島県知事)	楠瀬常猪
	ピアニスト	原智恵子
	上智大学教授	江藤太郎
常任理事	広島大学仏文科教授	中村義男
常任理事	エリザベト音楽学校主事	村上清人
理　事	ベルギー大使館参事	ヴェアレンス夫妻
〃	同　上	インデクウ夫妻
〃	同　上	ニウベルバーグ夫妻
〃	同　上	ブウベ夫妻
〃	上智大学教授	オーヴアメルン
〃	ベルギー使節団附	ダレマンス
〃	〃　陸軍大尉	ミーヌ
(在ベルギー　エリザベト音楽学校後援会役員)		
名誉総裁	リエージュ大司教	ヴァン・ゼイラン
名誉総裁	文部大臣	ハルメル
総　裁	ブリュッセル銀行頭取	ド・ロノワ伯爵
副総裁	元駐日大使	ド・バソンピェール男爵
〃	イエズス会ベルギー管区長	プラケ
会　長	ブリュッセル国立音楽院長	ポート
副会長	マリーヌ音楽学校長	ヌーフェル
〃		キネ

財政顧問	無任所大臣	
	ブリュッセル銀行理事	ド・シュライヴェル
理事長	ブリュッセルイエズス会	ル・フェーブル
理　事	博物館長	ボシュグラーブ
	ブリュッセル放送協会々長	コラール

（以下省略）

かくして当時西日本唯一の音楽単科の私立エリザベト音楽短期大学（2年制）は万全の準備が整い、昭和27年4月15日開学が宣せられ、第1回合格者38名の入学式がいとも荘厳にサビエル・ホール（注）で挙行されたのである。

（注）　このサビエル・ホールは幟町カトリック教会として昭和24年5月、聖フランシスコ・ザビエル来日400年記念のために建てられたもので、これが本学の講堂として正式に使用できるようになったのは短大発足後しかも世界平和記念聖堂が完成—昭和29.8.6—してからである。なお、上記の入学式の際、予科生20名、聴講生5名も入学している。

ところで当時の記録（村上清人氏記）によれば、この第1回の学生募集（定員30名）に際し、200名を越える志願者が殺到している。嬉しい悲鳴ではあったが、さて教室としては15坪に充たないバラック建校舎（後の女子寮食堂）—まだ短大校舎未完成のため—しかたなく、やむなく教会の食堂まで借用して入学試験を実施したことをはじめとして、今日では珍奇滑稽に属することが大真面目な問題であり、まさに「ロマンチック時代」にふさわしい出来事の連続であったと言われる。広島音楽学校長E・ゴーセンス師は新学長として晴れの祭壇と式壇にあがられたわけだが、その感慨はいかばかりであったか。昭和11年に初めて日本の地を踏まれて、戦前、戦後の苦難の道程、音楽教室と創始されてから心安まる暇もなく、いくたの経済的（財源）問題に腐心しつつ今日の音楽短大の発足を迎えられた心境は言語に絶するものがあったであろう。

いよいよスタートした。音楽学校時代の定期音楽会（第1回～第4回まで）はPRを兼ね、主として当時の知名演奏家を招いたり、本学のスタッフ（教師側）に大きく依存（もちろん生徒も参加した）したものであったが、短大としての陣容を整えてからは、学生を正式に加えた本格的な演奏会へと脱皮し飛躍することになった。

さて、本学の経営母体はイエズス会であるから、当然本学の教育方針はカトリシズムに基づくことになる。イエズス会400年の伝統的教育精神はここにも生かされて、厳格な指導方針が定められ、社会的変動と時流に添う方針の変更を余儀なくされる現在の新時代を迎えるまでは、男女共学の大学とはいえ、その交際も厳につつしむべく、在学中の結婚はもとより婚約も許可されず、制服制帽着用の上、すべては監督指導のもとにすすめられたわけである。今日の学生には想像もつかない程であった。本学の使命は布教にあるのではなく、どこまでも真摯な態度で芸術を研究するところにあった。しかも、これを探究して本源に至れば聖と美の一致点、すなわち神秘の世界へたどり着く、その意味からやがて本学の研究紀要に準ずるものとして、この「芸術と神秘」が発刊されることになったのである。

本学の建学の精神の表現については、初期と今日とではかなりの違いが見られるが、その根本精神は一貫している。下記は現行「学生便覧」に明示されているものである（注）。

（注）1.建学の精神

大学の究極目的は、人間社会全体の形成であり、従って個人の完成である。芸術は人格の開発と表現のためにも神との一致の道を切り開く人間相互の一致のための手段としても重要であることから、本大学は、人格完成を芸術、特に音楽の観点から強調するのである。

それゆえ、深く音楽芸術に関する理論および技能を教授研究すると共に、広く知識を授け、良識ある音楽家を育成することを旨とする。

1. 本大学は、カトリシズムの精神に基づいて創立され、かつそれを指導原理としている。
2. 本大学は、カトリック・イエズス会の教育方針に従い、一般教育科目および外国語にも力を注いでいる。
3. 本大学は、すべての人々は兄弟であるという精神から、家族的雰囲気をもととする学生1人1人とのきずなを教育の礎としている。
4. 本大学は、一般音楽の他に、グレゴリアン・チャント、ポリフォニーおよび現代宗教音楽等の教授・研究において他にみない特色を有している。
5. 本大学は、国際的な友好関係のもとに維持されており、日本古来の文化と西欧文明との融合をその究極の使命としている。
6. 本大学は、音楽芸術をとおして、神秘的観想の精神に達することを究極の教育理想としている。

（前掲の短大開設趣旨と比較対照のために）

ところで、短大発足後特に記録すべきことは何であるか。まず、学生の増大とともになんとしても校舎の内容施設の充実は強力に進められねばならない。それも学生の納入金や日本・広島からの浄財は期待できない。学長のはやる心はその母国であり、所属のイエズス会の有力者にすがって資金を外国に仰ぐことしかなかった。つぎつぎと購入された楽器、ついにはベルギーに三拝九拝して寄贈を受けられたサビエル・ホール備付の練習用パイプオルガンはもとより、最大の資金は校舎の増改築費である。海外への資金カンパの檄、イエズス会の司教、大司教を通しての懇請書翰の作成や発送のこと、さらに司祭職や学長職から、ひとりひとりの学生の監督に至るまで、いわば24時間勤務ともいうべき激務の連続である。そのファイトと熱意のしからしめることとは言え、常人のよくなし得るものではないと申さねばなるまい。着々と成果はあげられた。

しかも、ここに本学の中心使命でもある「宗教音楽」研究と実践のために不可欠な存在としての世界平和記念聖堂の完成を見逃すことはできない。世界的なスケールで5ヵ年の歳月を重ねて完成された大聖堂の献堂式（竣工式）は昭和29年8月6日であるが、それは単に教会行事に協力することだけでなく、本学の宗教音楽の

修練と実践の場を提供し、特に当初東洋一と言われたパイプオルガンが西ドイツのケルン市から寄贈されてからはオルガン科学生および指導担当者並びに来広される内外の専門家の貴重な発表楽器となっている(注)。

(注)　世界平和記念聖堂のパイプオルガンは昭和27年の暮から同28年の初頭(1952〜53)にかけて取りつけられたものである。このオルガンは当初2段の鍵盤と28個のストップ、それに1900本のパイプを備え、1馬力のモーターで送風する大がかりなもので、会堂のギャラリーに偉容を見せている。先にサビエル・ホールに備えつけられたベルギーより寄贈のオルガンとともに、西日本における一大偉観であった。その後日本の音楽大学や放送局等に大きなパイプオルガンがいくつか設置されている。そうしてたびたび内外のオルガン専門家の演奏が行なわれている。また故アルバート・シュヴァイツァーが生前アフリカからわざわざ代理者(高橋功博士)を派遣して、このパイプオルガンの視察をなさしめたことはあまり知られていない。現在学内には大小あわせて5台のパイプオルガンが備え付けられ、オルガン科学生の練習に大きな役割を演じている。

音楽短大第1回の卒業式が昭和29年3月15日であり、その前身の音楽学校の最後(第3回)の卒業式がその前年28年3月に行なわれている事を考えると、そこに移行並存の学校が存在したことを知るべきであろう。しかも新制短大に教職課程が設置されて、これを履修した者は中学校音楽科2級普通免許状が授与されるようになったことは、卒業後の就職希望者にとって一つの魅力であり福音であった。現に第1回卒業生以来、中学校あるいは高等学校に教鞭をとっている者が多いことを付記しておきたい。そしてその後の研究と外国留学によって、音楽専門家として立つ者が出現するに至ったことも当然のこととは言え、本学の成長と躍進を物語るものである(注)。

(注)　第1回卒の現水嶋教授をはじめ、外国留学を終えて本学に勤務する者、あるいは全国至る所で今日教育者として、あるいは専門家としての活動をつづける者も次第に増加しているのである。

この間に早くも「宗教音楽専攻科」(1年制、定員5名)の設置が認可され、昭和29年4月から開講された。これは短大の2年間が一般音楽はもちろん、特に宗教音楽の研究を深めるために不十分であることを痛感させられてのゴ学長の構想の実現である。これも神の思召しを信じつつ矢継ぎ早に可能な試行を求めてやまないゴ学長の司職者的先見による勇断と熱意の結果であろう。

つぎに特筆すべきは開学3年目、昭和29年の暮も迫る11月、スペイン文化使節として作曲家ホセ・プリエート師が本学のために特別指揮者として、約3ヵ月の予定で来学されたことである。その間学生の大半をともなって長崎から九州・山口を経て京阪、名古屋をも含めて東京までの大演奏旅行を敢行し、他に類例のない宗教合唱の極美を紹介し、東京銀座山葉ホールでの演奏はNHKテレビにまで放映されたことも忘れられないことである。

校舎も事務局も、たとえ小規模とはいえ、必要を充たす程度につぎつぎと完成されてゆくが、そこにゴ学長の「芸術と神秘」(現実と心配—太田先生評)の方向があったことを重ねて指摘したい。そのために昭和32年11月から約半年の予定で渡欧されていることは見落されてはならない。それは「欧州諸国の音楽事情の視察と新築校舎の資金獲得、日本の現行カトリック聖歌集の改訂(委員長古屋氏)に当たって西欧の現代宗教音楽について調査するためであった」とみずから語られていることでも推察できよう。翌33年10月4日(ゴ学長帰日後)にはローマよりイエズス会東洋副総長デスーザ神父を迎えて、本学創立10周年を記念する行事が進められていた。本学も漸く幼児期を過ぎて成長の旺盛な少年期に入ったと言わねばなるまい。

ゴ学長の10周年を記念する挨拶を紹介して第2期の記録を結びたいと思う(エリザベト・タイムズ第11号—1958.10.4—による)。

〔創立10周年を迎えて〕

学長　E・ゴーセンス

わがエリザベト音楽学校の開設10周年に当って、私たちは過去10年間に賜わった限りないご援助に対して神に感謝しなければなりません。私はすべての先生方、事務員、父兄、卒業生並びに学生たちの立派なご協力にも深く謝意を表します。

わが学園には、他に見られない特別な性格があるので、その目標を実現することは常に容易なことではありませんでした。しかしながら、主のご助力によって今日迄成功の道を歩んで参りました。

私の望みは、わがエリザベトを日本ばかりでなく東洋のすべての国々のために、宗教音楽のセンターにすることです。

昭和33年10月4日

■第3期　成長期

（昭和34年4月　～　昭和38年3月）

この期に入るころは、短期大学の学生数も100名をはるかに越え、校舎もほぼ現在の事務局とつづく3階建本館と現在の東側4階と、3階の校舎の前身であった2階つづきの校舎は完成していたのである（昭和32年4月）。人間の成長でも軌道に乗ると、短期間に見違えるように変貌するものである。本学の飛躍的発展はこれからである。

さて、音楽専門の研究のために短大2年間は文字通りぎっしりとつまった時間割で追い立てられ、学生は練習と勉学の暇もないほどであり、精神的なゆとりも得られず、もちろん在広諸大学（私立の新設大学も次第に増加）との接触や交流も大学の性格上から時間的余裕がないこともあって、いわば隔離された音楽の殿堂の観であった。この壁を定期演奏会等でほぐし、研究の実態を一般に公開して、たえず学内外の協力者、地元や各方面の音楽ファンの方々の理解と声援を仰ぎ、少しでも地方の音楽文化の向上に尽くそうと志してきたわけである。

このような意味から考えても、音楽の高等専門教育は2年という短期間では充分な成果を期することができないことが、指導者の側からも学ぶ側からも痛感され、成長期の短大は内からの抑えがたい要求によって新しき段階に入ることになった。これが昭和34年4月から正式の文部省の認可のもとに生まれた3年制の音楽短大への拡大である。その結果、昭和29年4月から設置されていた「宗教音楽専攻科」および2年制短大の予科とも呼ぶべき1年間のフレッシュマンコース（定員20名）は、発展的解消をしたことも忘れられてならないことであろう。いわば水の流れのように、本学の成長は一挙にではなく、段階的によどみや急流そして曲折をつくりつつ大海へと近づいて行ったわけである（注）。

（注）　当時短大の1年生を、ジュニアクラス、2年生をシニアクラス、予科生をフレッシュマンクラスと称していた。フレッシュマンコースは2年制短大設置後ずっとつづいていたもので入学準備のため特に専門の音楽、技能を学ぶ課程の段階に重点がおかれ、文部省の認可は不要であった。

しかも2年制短大から3年制短大へ転進するにあたって、ここにもまた一つの移行措置を講ぜざるをえない落し児が生まれた。それがエリザベト短期大学宗教科（2年制、夜間第2部、定員30名）である。これも同34年に設置され、昭和38年現4年制大学の出現まで4ヵ年しかつづかなかった。昼間勤務を有する既婚未婚の向学の士が入学した。聴講生も許可されたからはじめは希望者が多かったのである。それは宗教科目、語学を中心として一般教養科目も加えられたもので、短大卒業の単位が与えられ、高い教養を得させるのが目的であったが、卒業後の資格（免許状中2級宗教科）もカトリックミッションスクール以外には活用できない狭い門という理由もあって、応募者も減少し、また4年制大学への飛躍の重点的対策も考慮されて惜しくも廃止の運命をたどらざるを得なかったのである。その間の相当数の聴講生は別として、エリザベト同窓会名簿に掲載されている15名の卒業者中には現在各方面にすぐれた活躍をしている人があることも指摘しておきたい。

（注）　ゴ師はエリザベトのたゆみない成長とそれを推進するための全身全霊を傾けての配慮と施策、それに学園内外の細部に至るまでの指導監理、いかに熱意とユーモアと頑固さがあるとしても人間としての限界がある。常人のなしえざるところまで眼のとどく性格であったけれども、休む暇もないこうした日夜の奔走は、ちょっとしたすきにも健康をむしばむものである。第2回目の単身渡欧の際（昭和36年）、滞欧中病魔に侵されて入院、ついに村上清人先生がはるばるヨーロッパまで行き、同伴帰国という出来事さえも起こっている。帰日後、「神経性心臓病」の診断を受け、しばらく静養ということになった。その後元気回復されたが、4年制大学の発足も大きな喜びと安心を与えたというべきか。

なお、ここで本学の国際的交流の方向について触れておきたい。これまでの実績とゴ学長の努力の結果、昭和36年12月、ついに「ローマ教皇庁宗教音楽院」から、本学の「グレゴリアン・チャント」、「パイプオルガン」、「宗教音楽理論」および「宗教音楽作曲」の課程が同音楽院の課程として承認され、これを修了したものにはB.S.M.（宗教音楽学士）の称号が授与されることになったことは特記すべきことであろう。それを望む学生にとって大きな励ましとなったのである。

さて、ここで成長期における本学の音楽的使命を果たす上で重要な演奏会のことに少しふれておきたい。広島音楽学校開校以来、校内の定期演奏会（音楽会）は今ではほとんど定例的となってきたが、それ以外に地方音楽文化への寄与と、前述したように本学と地元との結びつきを一層固めるための演奏会を本学主催あるいは協賛の形で数多く開き、または開こうとしていることである。国の内外の知名の専門家を招聘し、格調高い内容を紹介していることによっても知られよう。どんな専門家が来演しているか、本学日誌に見られるが、特に昭和37年7月20日、現代フランス作曲界のトップを行くパリ聖トリニテ教会のオルガニストとして著名なオリヴィエ・メシアン氏がピアニストのイヴォンヌ・ロリオ女史を同伴して来学、翌21日に開かれた講堂での演奏会は当時の学生や一般聴衆の追憶とともに本学の記録に長く残されるものであろう。氏はNHKの招きに応じて来日、国内各地での演奏会等多忙なスケジュールを終えて来広されたのである。ゴ学長の特別な配慮によるものであった。曲目は

第1部　「幼な児イエズスへの20のまなざし」抜粋（メシアン作曲）
第2部　「アーメンの幻影」

で、第1部はロリオ女史のピアノ独奏、第2部は両名の2台のピアノに依る演奏であった。2時間に近い演奏に聴衆は次元の高い音楽の普遍性に魅せられたのである。「私の音楽的立場」と題しての講演もまた感銘を与えた。「私は聴覚に逸楽的なまでに、洗練さ

れた喜びを与える虹のように、多彩な音楽を求めている」とは氏の音楽的立場を示す言葉である。かくしてメシアンの来学はフランス現代音楽の研究課題を提供したほかに、本学の4年制大学昇格への努力に勇気と確信を得させ、さらにわれわれに芸術家の謙遜、単純、喜びを身をもって示され、まことに得がたいチャンスであったのである。

加速度的に成長してきた本学は、曲がりなりにも今や4年制大学昇格への準備と体制をととのえて、ここに同37年9月文部省への申請を決意したわけである。申請の内容の要点をあげておこう。

1.昭和34年設置された夜間の宗教科（第二部）は廃止する。

2.本学は音楽学部のみとし、エリザベト音楽大学の名称をとる。

3.音楽学部には音楽学科を置き従来通り次の選修（専修）を置く。

A　宗教音楽選修　（このうちAの宗教音楽の研究
B　作曲選修　　には本学の特徴を明確にする
C　音楽学選修　　意味で特に力をいれる）
D　声楽選修
E　ピアノ選修
F　弦楽器選修
G　管楽器選修

4.文部省の設置基準に従い、現在の幟町の校舎、敷地のほかに、賀茂郡西条町に校地約7,500坪を購入の上校舎その他全学的に施設設備を段階的に拡充する。

5.教授スタッフをさらに強化拡充する。

以上のような方向での申請が文部省の認可を得、4年制音楽大学は広島音楽教室の出現以来15年の曲折を経てついに実現した。朗報が伝わった時大学をあげての喜びと感激は筆舌に尽くせないほどである。ゴ学長の夢は現実のものとなった。その時の学長の喜びもひとしおであった。また、広島の地に、そして西日本に、唯一の4年制音楽学科の大学の出現、しかも外国の聖職者の手によって、国際的な性格を有する大学としての地盤を固めてきたことは、たとえそのスケールが大きいとは申されないにしても、日本の大学史上に特筆すべきことではあるまいか。それにしても15年間の間に時と処を見つけてゴ師の遠大な夢の実現のために、外廓的には母体であるイエズス会とその上司、たゆみない援助と声援と協力と犠牲を惜しまれなかった各階層の多くの有志、本学に機縁を持たれ、出入された内外の専門家や一般篤志家等の存在を感謝しなければならないのではあるまいか。

昭和38（1963）年4月1日、本学は内面的には、胎動期の広島音楽教室、誕生期の短大（2年制）、つづく成長期の短大（3年制）に学び、終了した卒業者とゴ師が日頃口にされていた教職員、事務職員、学生、父兄をあわせた家庭的一致による見えざる犠牲と努力と協力と推進の誠を基盤として、その歴史的躍進の第1歩をスタートしたものと言うべきであろうか。

■第4期　成人期

（昭和38年4月　～　同48年現在）

いよいよエリザベト音楽大学としてスタートをきった。期待も大きく志願者も予想を上まわり、定員50名の数倍にも達し、合格の上入学（昭和38年4月15日）した学生は78名にのぼった。入学生の音楽的レベルは年々向上し、すでに幼稚園期よりピアノレッスンを受けて今日に至っているものが大半である。ゴ学長の杞憂は無用に終わり、幸先のよいスタートであった。この日以来、前にも増して学内の雰囲気が何か期待にふくらみ、新しい躍動を開始したことは事実である。学生数も、しばらくは3年制短大の学生と並存しつつ増えつづけ、また、専任の教職員の充実に加えて非常勤講師の数は、一般、専門科目をあわせて、短大時代に比して倍加したというべきであろう。

ところで、4年制大学への昇格を単に学内で祝するだけでは足らず、学外に喜びを伝える意味も含めて、周到な計画のもとにつぎつぎと演奏会がくり広げられたが、なかでも同年10月21日広島市公会堂における特別演奏会は圧巻である。ピアノの安川加寿子、声楽の古沢淑子の両女史を招待し、それに本学のピアノ主任教授井上二葉（現小池）女史を加えた「フランス音楽の夕べ」であった。

特に当夜のプログラムをあげておこう。

ピアノ独奏　安　川　加寿子
　ドヴュッシー　　アナカプリの丘・沈める寺院・雨の庭
　ラヴェル　　クープランの墓
ソプラノ独唱　古　沢　淑　子
　メシアン　　“ハラウィより”
　フォーレ　　とざされし庭
　プーランク　　アポリネールの4つの詩
ピアノ二重奏　安　川　加寿子
　　井　上　二　葉
　シャブリエ　　三つのヴァルスロマンティーク
　ミヨー　　スカラムーシュ

本邦初演のものもあり、次元の高いものがあったが、フランス音楽の紹介のための好機であった。

さて、どうにか一人前に成人しかけた本学の姿は、ベルギー国皇太后をはじめ関係者一同の関心のまとになった。その結果、国賓として来日されたボードワン国王並びにファビオラ王妃ご夫妻の特別なご厚意により、原爆の地広島視察をかねてわざわざ来学されるという前代未聞のでき事が実現したのである。あけて昭和39年1月28日のことである。ゴ学長をはじめ挙学一致の事前準備は申すまでもないが、日本政府の周密な奉迎計画にもとづいて当日を迎えたわけである。あいにくの冷雨降りしきる中を、この小さな学園の講堂における奉迎諸行事、大学の会議室でのゴ学長ほか教職

員の歓迎レセプション、前後約40分の間終始にこやかにご視察いただいたことは、当時のアルバムに飾されているが、これは本学の歴史に輝かしい大きな足跡を印した事件である。

当日のゴ学長の「国王奉迎のご挨拶」を掲げて、その喜びと感激を永久にとどめたい。

国王奉迎のご挨拶

ゴーセンス学長

謹しみてご挨拶申し上げます。

この度、ベルギー国王並びに王妃両陛下を、我がエリザベト音楽大学にお迎え致しましたことは、本学教職員及び学生一同にとりまして、無上の喜びであり、且つ又、光栄に存ずる次第でございます。

本学は今より15年前かたじけなくもエリザベト皇太后陛下の御名を賜わり発足致しましたが、爾来順調なる発展を遂げ、4年制大学として認可も受け、更に、ローマ教皇庁立宗教音楽院の姉妹校として今日に至っています。

この度の両陛下のご訪問によりましては、私共は新たなる勇気を得、一層本学の発展に力を尽し、音楽芸術の教授・研究に努めるとともに、広島に存在する大学の担う使命の一つとして、万国共通の言語である音楽を通じて世界平和の達成に微力を捧げんとするものであります。

終りにのぞみ、両陛下並びにエリザベト皇太后陛下に対し、心からなる感謝の意を表するものでございます。

尚、本日はあいにくと雨天でございますが、私の故郷リエージュではこの雨を「国の雨」と称しています。しかし広島の街に降る今日の雨は、おそらく原爆犠牲者の苦しみの象徴ともいうべきものでありましょう。又、本学の父兄及び卒業生達は校庭においてご奉迎申し上げる予定でございましたが、この雨のため、世界平和記念聖堂において両陛下とともに戦争犠牲者のため祈りたいと存じますので、特にお許しを賜わりたいと存じます。

その後4年制大学の昇格を転機に、ゴ学長の構想をさらに西条町教養部における「東洋宗教音楽研究所」（すでに昭和35年3月、カトリック聖歌集改訂の必要から幟町本部に付設のもの）「西条文化教室」、幟町本部における「エリザベト音楽園」（西条を含む）、「エリザベト箏曲楽園」の4つの附属施設の総合設置へと展開させたことも一言しておくべきであろう。これは同学長が理事長職に専念すべく学長職を辞任せられた昭和45年3月まで継続され、そのために瀬戸由子秘書の東南アジア留学、あるいはそれぞれの分野での専門家の研究と指導が推進され画策されたのであるが、情勢の変化もあり、現在はエリザベト音楽園（注）の強化にしぼられている。

（注）　エリザベト音楽園は、幼・小・中・高の幼少年の音楽教育をあずかり、将来その方面に志す子供たちをはげまし、同時に本学の実績を示し、音楽文化を継承するよき後輩を育てることを使命とするものである。

そもそもこれは、初期の広島音楽学校時代に山本寿先生を中心として、幼少年の希望者にピアノ個人教授をはじめられたのに由来する。音楽短大のスタートとともに大学の「附属児童音楽園」として募集をはじめ、毎年その発表会を開くようになった。そのスタッフも本学教授および卒業生を講師としてそのレッスンを担当してきたが、4年制大学の昇格を機会にこれが名称、募集要項を明確にし、指導スタッフも強化し、父兄会も組織して毎年定例的に音楽（発表）会を開催し、一層の成果を期しているわけである。現在、幟町本部に180名余、西条分校に20数名の子供が来園しており、希望によってピアノのほかにヴァイオリン、ソルフェージュも教え、講師も本学専任教授を含めて20数名がこれに当たっている。

さて、つぎに特記すべきことは、昭和27年の本学（短大）の開設以来の後援者であり、今日まで陰に陽に深いご理解とご援助を賜わっていたベルギー国エリザベト皇太后陛下がご逝去されたことである。昭和40年11月23日のことである。ゴ学長にとって深い悲しみであり、遺恨であったことは言うまでもない。その慰霊と感謝の誠をささげ、ご冥福を祈るために、1週間後の12月1日、駐日ベルギー国大使アルベール・フップルス氏臨席の上、全学園教職員学生参加のもとに追悼ミサおよび赦禱式が世界平和記念聖堂で、ゴ学長の司式によって厳粛にとり行なわれたのである。

しかも、同陛下のご生前に、漸く成人の域に達した本学の姿を国王ご夫妻のご報告によって確認していただいたことは、せめてもの本学の光栄であり、女王へのはなむけであったと言えよう。さらにゴ学長にとっては、同陛下ご逝去の直前に、ベルギー国政府より「レオポルト騎士勲章」を授与されたことは無上の光栄であり、なぐさめであろう。

つぎにゴ学長にとって第2の祝福が到来したこともあげねばならない。すなわち、それは昭和44年3月、明治百年記念に当り、日本政府より「勲四等瑞宝章」が授与されたことである。これらは、ひとりゴ学長の栄誉にとどまらず、本学にとっても長く記憶されるべきことでなくてはならない。しかもこの時点で、本学はさらに過去を反省し、将来への充実を企図する必要が再認されるようになったことも喜ばなければならない。これは昭和42年ごろより次第に台頭し、やがて全国的な学生運動の旋風が吹き荒れ、社会情勢が大きく変動しはじめたことにも由来することでもある。本学の飛躍、そして真の成人期―充実期への脱皮であろう。入学生の動向も従来の入学生とは大きく変容したことも無視できないであろう。

4年制大学の第1回（通算第13回）の卒業式は昭和42年3月15日（3年制から4年制への移行措置のため前年の41年3月は卒業生なし）に行なわれ、69名の卒業生を出しているが、その後の卒業生数も入学者に比例して増大していることも見のがせないことである。現在（昭和48年度）の在学生は370余名であるが、これが短大初期の5倍以上にふくれあがっていることを思えば、まったく今

昔の感なきを得ないのである。

つぎに同42年（1967）の4月より、かねて申請中の「宗教音楽科」が文部省の正式認可を得てスタートしたことも特筆すべきである。これが日本の音楽大学では最初の試みともいうべき増設科であるだけに、本学の特質を象徴するものとして、その内容と今後のあり方と成果は各方面から注目されているのである。しかもこれによって、多年にわたるゴ学長の念願と本学の志向していた中心的方向が確立するに至ったと言わなければならない。音楽科の中のパイプオルガン専修が宗教音楽科の専修として組みかえられるに至ったのは、越えて昭和48年度の入学生からである。

このように、4年制大学の発足以来、いろいろな面において本学の変容と充実への施策がもたらされつつあるが、教授スタッフ、校舎の増改築はもちろん、教育課程の改編充実、管理機構の整備、さらに学生指導とその組織や活動の面、外廓団体としての後援会（父兄会）や同窓会との協力体制の強化等の学内外の施策も、新しい組織と全学一体の企画をもって推進しなければその成果は期しがたい情勢となってきたのである。

ここで、創立以来理事長兼学長として、陣頭叱咤本学の全責任を負うてひとすじに神の思召のままに突進をつづけられたゴ師には心身ともに疲労が見えはじめたことも記さねばならない。精神力にも限界があろう。その上、ゴ師の場合は国の内外の表彰を受けられ、エリザベトも待望の4年制大学に躍進し、今やその方向が決定した喜びと安心感もあり、この時点で激職を去って静かに専門の研究にいそしみ、本学の内容充実に力をいれようとの望みもあったと推察されるのであるが、ついに昭和45年3月学長職を辞任され、理事長職に専念すべく決意されたのである。

その結果同年4月1日ホセ・テホン教授が新学長（第2代）に就任されることになったのである。新学長時代に入ったエリザベト音大の躍動は、時代の動向と並行して大きく前進した。いろいろな学内機構の整備強化、音大にふさわしい内容、特に演奏会の充実、学生会の活動も軌道に乗りつつある。特に指摘しておきたいのは、学生会主催による大学祭が昭和45年以来、音楽大学にふさわしい形でスケールも大きく開催されている点である（注）。

（注）　ここで少し触れておきたいのは、現在大学祭に包含されているバザーのことである。本学の4年制大学昇格の前年、すなわち昭和37年10月13日、14日に第1回バザーが催されている。学生会の前身である学友会と教職員（学校当局）との共同主催であった。その目的は、4年制大学昇格をめざして、それに必要な施設拡充並びに設備充実に協力するためであった。しかし真の目的は、物的整備に協力するためだけでなく、全学園の一致協力の精神—ゴ師の強調語「一致の精神」—をさらに固めるためのものであった。その後毎年開くことを申し合わせて昭和44年までに相当（数百万円余）な純利を本学に提供してきた。昭和45年度以来学生会主催の大学祭に包含されているが、その収益も大きく、それは単に大学の設備への協力だけでなく、学生の自主的活動と福祉施設の財源となっているのである。

昭和44年4月、新館（現4階建校舎）の完成は、全校舎の冷暖房施設への増改築を加えて、いよいよ講義室、特別教室、研究室、楽器練習室の飛躍的増加をもたらしたことを忘れてはなるまい。これはまた、設備の充実をすべての面において増進する機縁となったことも見のがしてはなるまい。もちろん、近き将来講堂の改築（鉄骨数階建、大ホール、大教室、レッスン室、研究室等を含む）の計画の推進を含めて、本学の充実と発展のための施策は、①単に施設や設備の面だけでなく、②教授スタッフの強化、③学生の実力を培うための内容の面をあわせ、なお、④対外的活動において本学の使命を遂行する上に間断なくつづけられねばならないのである。

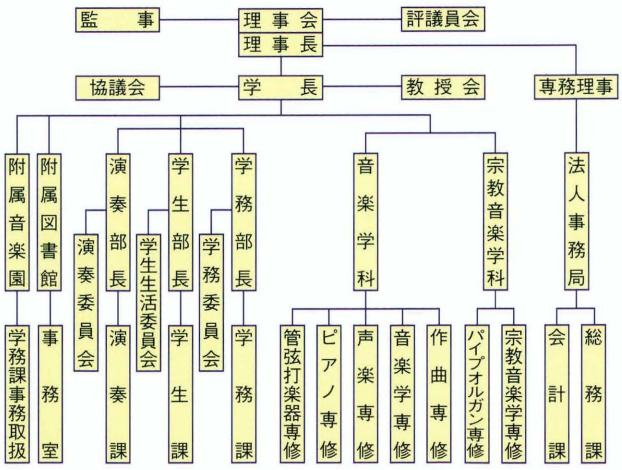
（注）　現在本学の設備のうち、主要なものはグランドピアノ25台、アップライトピアノ42台、チェンバロ1台、パイプオルガン5台（ほかに聖堂の大パイプオルガン使用）、電子オルガン、オーケストラ楽器等である。また、図書館も、現在の新館4階に移動（本館3階から）してから漸次充実を期し、各種図書、楽譜等も年々増加の一途をたどっている。現在の蔵書数はつぎのとおりである。

図書館蔵書数　（昭和48年10月27日現在）

	音楽	一般	計
和書	1,472	1,743	3,215
洋書	1,870	5,543	7,413
楽譜	10,662		10,662
レコード,テープ	1,042		1,042
計	15,046	7,286	22,332

最後に新大学の再建を期して活動をつづけている「学校法人エリザベト音楽大学管理運営機構図」を掲載しておこう。もちろん機構の運営は人にあるわけである。本学が芸術をとおして真に愛をはぐくみ、愛される学園として不動の地歩を固めるためには、前途になお守成の多難を乗り越える覚悟をしなければならないであろう。

学校法人エリザベト音楽大学管理運営機構図



■追記

本学25年の記録を終るにあたり、つつしんでゴーセンス理事長のご帰天のことに触れさせていただきたい。学長職辞任後もひきつづき多忙な活動と研究にも意をそそがれていたが、昭和45年末ごろから身体の異状が表面化し、ついに糖尿病の診断がくだされたのである。はじめはそれほど心配もなく、次第に快方に向かわれるものと思われていたが、徐々に衰弱が加わったこともあって、翌46年4月静養をかねてベルギーに帰国されたのである。激職をはなれての期間、たしかに全快を祈念していたわれわれの期待に反し、翌47年2月瀬戸秘書をともなってご帰広の際は、以前のお元気な風貌はみられないほどであった。それでも同理事長自身は再起を期せられて、療養をつづけられ、われわれもそれを信じていたのである。

しかるに同12月、ついに広島で入院加療の身となられ、約3ヵ月の療養もその効むなしく、昭和48(1973)年3月8日午前3時40分、この世にかぎりない愛執と多くの未完成の仕事を思念されつつ神に召されたのである。若き日—来日以前—から日本にあこがれ、こよなく日本を愛しつづけたゴーセンス師、聖職者として、また音楽者として波乱の半生を本学の成育のためにささげられ、多大の業績と不滅の精神的遺産をこの国とこの大学に残して帰天されたのである。3月10日、世界平和記念聖堂で、その学園葬は同師の人柄と事業をたたえるにふさわしい盛大な追悼ミサおよび赦禱式で飾られた。エリザベト音楽大学の名とともに永久にたたえられるべき創立者である。目下、エリザベト同窓会を主体として記念胸像建設の議がすすめられているので、その生前の英姿が本学のシンボルとして学園の一角にまみえる日も遠くないであろう。

また同年4月、新理事長(第2代)として鎌田武夫教授が就任されてより、この創立者の精神を生かして本学の充実を強調されているので、現学長と一体となって、いよいよ本学の将来への躍進と充実がはかられてゆくものと期待されるのである。ゴーセンス師のご冥福と天国でのご安息、そしてそこから本学を永遠にお守りくださるよう祈ってやまない次第である。

(注)　本稿をまとめる上に一部参考にした資料は、つぎのものである。
①「エリザベトタイムズ」「第1号(昭28.7)から第23号(昭41.1967、発行、以後廃刊)
②「エリザベト音大通信」—第1号(昭45.7)と第2号(昭46.12)
③「芸術と神秘」—第1号(昭32.1)から第18号(昭46.3)
④「同窓会報」—第1号から第3号
⑤その他

■あとがき

以上本学25年の記録は、芸術—音楽—を求めて音楽大学を見つけるまでの成育(創業)の歴史の展開であるが、これは同時にゴ師自身の25年間の人生のあゆみと言うべきものではあるまいか。したがって、記しきたり、語りきたり、聞きあつめれば、その種は尽きることがない。

筆者はペンをとるに当たって、学園史として総合編年史的にまとめるべきか、または分類史的に記述すべきかについてためらった。もし後者として詳述するとすれば、少なくともつぎの要目の面から重点的に眺めることが必要と考えられよう。

(1)学園の性格と教育の方針
(2)音楽大学としての校舎、施設、設備の財源と充実
(3)本学への後援者、協力者並びに教職員(新旧交替を含めて)の往来
(4)学園の制度的展開と学園運営機構の消長
(5)本学の教科課程および履修規程(学則)の変遷
(6)本学の教育(講義・レッスン)の実際と学生指導の今昔
(7)今日までの各種演奏会の内容と成果
(8)特に内外知名演奏家の来訪とその演奏会(音大主催、協賛、賛助)
(9)本学への国際的人物の往来
(10)本学の学生会の活動と父兄会、後援会の今昔
(11)本学の卒業生の動静と同窓会の活躍
(12)本学附属音楽園のあゆみと教育の実態
(13)本学の成長に寄与された聖職者と全国カトリック教会(特に幟町教会)
(14)ゴーセンス師の人物と理想(逸話を含めて)
(15)本学園の存在理由と将来への構想
(16)本学専任教職員の研究、発表とその業績
(17)その他—(学園の評価と反省を含めて)

筆者は限られた時間とスペースの上から、以上のような項目の面を4期に区分して総合的にふれ、一貫して編年史的にこの25年間をふり返りつつ、故ゴーセンス師のたゆみないアイディアの展開をあとづけようと試みた次第である。それだけに雑然として、書き尽くせない面、不備不足、脱落の箇所が多々あるであろう。これらの点は付録の沿革日誌—これも資料不足で脱落多く—で補足させていただくとともに、本学の内外のゆかりの深い方々に思い出の資料を提供しようとした筆者の意図を了解の上ご寛恕を願ってやまない。

なお、ほかに隠れた逸話や洩れた資料があればすすんでご提供を請い、さらに不備な点を是正し、将来機会があればこの記録の改編も不可能ではないと思うのである。　(1973.10.30)

■付録

〔エリザベト音楽大学卒業生〕

昭和	（西暦）	回数	卒業生数	
26	（1951）	1	8	広島音楽学校
27	（1952）	2	10	
28	（1953）	3	14	
29	（1954）	1	35	以下エリザベト音楽短大
30	（1955）	2	30	
31	（1956）	3	29	
32	（1957）	4	34	
33	（1958）	5	38	
34	（1959）	6	36	
35	（1960）	7	47	
36	（1961）	8	15	
37	（1962）	9	36	
38	（1963）	10	45	
39	（1964）	11	50	
40	（1965）	12	59	
41	（1966）	卒業生なし		

昭和	（西暦）	回数	卒業生数	
42	（1967）	13	69	以下エリザベト音楽大学
43	（1968）	14	62	
44	（1969）	15	88	
45	（1970）	16	75	
46	（1971）	17	78	
47	（1972）	18	91	
48	（1973）	19	78	

（参考）
〔広島音楽学校時代在学生〕

昭和	本科生	選科生	選修科生
23	54	150	
24	70	214	
25	35	193	
26	18	179	
27	14	200	18

（備考）

大学名の由来について

本学の「エリザベト」の名称は、特に故ゴーセンス師がその生国ベルギー国の皇太后エリザベト女王陛下のご裁可を得て賜わったものである。女王はヨーロッパの皇室中でも最も音楽をご庇護される方として有名であった。ブルッセルにおけるエリザベト女王国際音楽コンクールは最もレベルの高い登龍門としてよく知られており、陛下はご在世中、いつも本学のことに意を注がれ、しばしば大使その他の徳臣をご派遣の上、近況を調査させられ、種々のご配慮を賜わっている。後にベルギー国王ご夫妻の公式訪日の際にわざわざ本学のご視察を忝うしたこと等とともに、記憶すべきである。

校章の意味について

これは全体として音楽の「楽」の字を型どっている。王冠およびリボンは、ベルギー国皇太后エリザベト陛下ご後援によるものであることを示しており、また十字架は、本学の教育方針がカトリシズムにもとづいていることをあらわしている。この校章の考案については創立者ゴーセンス師を中心に村上先生および福田先生その他専門家の方々の苦心が秘められているのである。

■参考（現在のデータ）

〔エリザベト音楽大学卒業生・修了生（昭和49年以降）〕

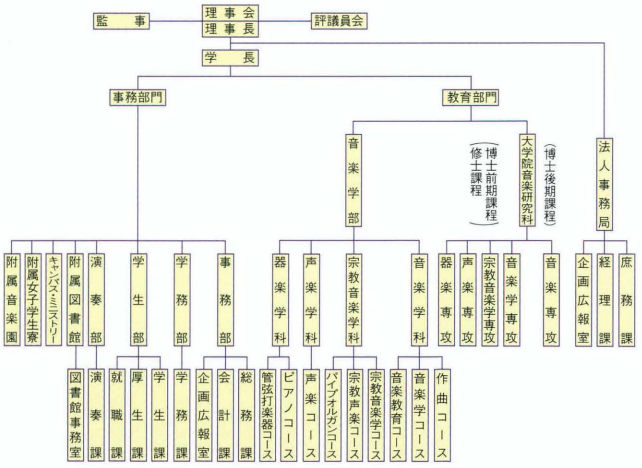
昭和	（西暦）	回数	卒業生数	
49	（1974）	20	75	
50	（1975）	21	82	
51	（1976）	22	88	
52	（1977）	23	109	
53	（1978）	24	101	
54	（1979）	25	116	
55	（1980）	26	119	
56	（1981）	27	105	専攻科10
57	（1982）	28	120	〃 9
58	（1983）	29	129	〃 6
59	（1984）	30	127	〃 4
60	（1985）	31	128	〃 4
61	（1986）	32	128	〃 11
62	（1987）	33	124	〃 8
63	（1988）	34	119	〃 11

平成	（西暦）	回数	卒業生数	
元	（1989）	35	131	専攻科 9
2	（1990）	36	131	〃 12
3	（1991）	37	135	
4	（1992）	38	128	大学院修士 7
5	（1993）	39	134	〃 21
6	（1994）	40	155	〃 17
7	（1995）	41	155	〃 18
8	（1996）	42	157	〃 23
9	（1997）	43	151	〃 19
10	（1998）	44	155	〃 18
	大学院博士後期1（10月7日）			

附属図書館資料数

（平成10（1998）年3月31日現在）

和書	23,477冊
洋書	22,162冊
和雑誌	約340種
洋雑誌	約520種
楽譜	46,526冊
視聴覚資料	約15,100点

和書・洋書のうち55%は音楽図書
全雑誌数の90%は音楽雑誌

学校法人エリザベト音楽大学管理運営機構図〔平成10（1998）年度〕